

わらべうたのリズムと五音音階を用いた音楽づくりの試み

— 小学校音楽科における教材開発研究 —

Attempt at Creative Music Making utilizing the rhythm of the *Warabe uta* and pentatonic:
a study of the development of teaching materials in the musical education of elementary schools

次世代教育学部こども発達学科
室町さやか

MUROMACHI, Sayaka

Department of Child Development
Faculty of Education for Future Generations

Abstract : This study attempts to show the teaching material which consists of the rhythm and pentatonic of Warabe uta in music education at elementary school. First, this study analysed the teaching materials of Creative Music Making (CMM) in the textbooks. Second, the practice of CMM is showed. It is important to combine play with study when introducing warabe uta as a teaching material. Students can acquire musical elements such as rhythm and scale through the experience of play. The following activities were undertaken as part of this study: 1) Play the Warabe uta 'Yoisassa'. 2) Analyse the rhythm of the 'Yoisassa'. 3) Create a rhythm using the provided rhythm. 4) Create a melody utilizing the pentatonic to accompany the rhythm that you created in step 3. 5) Write the words to the song. This practice has several educational effects: 1) Understanding of the rhythm. 2) Reconstruction of through daily experience. 3) Raising the feeling to enjoy the CMM.

Keywords : warabe uta, Creative Music Making, development of teaching materials, musical education

1. はじめに

小学校音楽科教育の内容は、「A表現」「B鑑賞」で構成されており、「A表現」における活動として歌唱、器楽、音楽づくりが挙げられている。音楽づくりは子どもが様々な音色、音符、音高を組み合わせて音楽をつくることによって自分の想像したことや意図したことを表現し、その過程で音符、休符、音楽に関わる用語などの様々な知識を獲得し用いることができるようになる活動である。本研究は小学校音楽科の「音楽づくり」の活動において、わらべうたのリズムと五音音階を用いた教材を開発しようと試みたものである。本研究ではわらべうた《ヨイサッサ》のリズムと五音音階を用いた音楽づくりの方法を考案し、小学校での実践に先立って岡山県私立A大学の教育学部の学生たちを対象に音楽づくりの講義を行った。

わらべうたを教育に採り入れる方法としては、歌唱教材（A活動）、およびわらべうたの音組織に基づく

基礎（B活動）から成る「二本立て方式」と呼ばれる実践が1960年代に日本教職員組合によって提唱されている。しかしながらこの方法ではわらべうたと「遊び」が分離されてしまい、楽しさや身体活動等のわらべうたを構成する重要な要素が抜け落ちてしまい、学習教材としてのわらべうたの有用性が発揮しきれないという点が複数の先行研究によって指摘されている。また西條（2008）によるわらべうたを用いた音楽科授業の研究でも、わらべうたを構成する音楽的諸要素と遊びとを切り離さず学習へと展開していくことの重要性が述べられている。本研究の実践は、小島（2009）が論じたわらべうた実践のアプローチのうち「経験の再構成型」に沿って音楽づくりを展開するものである。本研究の実践では、わらべうた《ヨイサッサ》はまず遊びの形で導入され、楽曲に含まれる音符やリズムは遊びを通して獲得される。次に楽曲がどのような音やリズムで構成されるのかを分析し、獲得した意味を用いて音楽づくりを行う¹⁾。本実践は「遊び」と

「音楽づくり」が密接な繋がりを持ち、わらべうたを音楽教育に用いるひとつの手法を提示するものである。

2. 教科書における「音楽づくり」

文末の表1は、教育芸術社発行の教科書「小学生の音楽1～6」における「音楽づくり」の教材を分析したものである。四分音符、四分休符、二分音符、括られた八分音符が多く使用されており、シンコペーションや付点四分音符と八分音符の組み合わせといったリズムも見ることができる。リズムの構成方法としては、児童が個々の音符を選ぶ形態と、あらかじめ決められたリズムが書かれた小節を選ぶ形態のふたつのパターンに分けることができる。音高に関しては、あらかじめ決められた音を選択する形態での教材では最大六音が提示されているが、児童がひとつひとつの音を自由に選ぶ形態での教材に提示されている音は最大五音である。その他の音楽的要素に関しては、音楽の仕組みである「反復」や「問いと答え」は低学年のうちから学ぶことが可能になっており、六年生の課題では終止音や和声など、学習指導要領で定められてはいない音楽の構成要素が盛り込まれている教材が掲載されている。拍子に関しては低学年のみ4分の2拍子であり、その他の学年は4分の4拍子となっている。

2008年改訂の学習指導要領では、それまで「つくって表現できるようにする」とされていた創造的音楽活動が「音楽づくり」と改められ、「音を音楽へと構成する」活動が強調されている。この方針が音楽づくりにおける子どもの自由な発想を制限することに繋がってはならないということは論を待たないが²⁾、教科書に掲載された教材の分析からも音楽づくりに一定の「枠組み」を与えることが必要とされていることが明らかである。ここでいう枠組みとは音楽づくり教材において使用することを指定された音符やリズム、音楽の仕組みなどの音楽を構成する諸要素を指すものであり、子どもたちは指定された音符やリズムから選択肢を得ることによって音を音楽へと構成する過程において創造の楽しみを味わうことが可能であると考えられる。すべてを自由に、好きなように音楽づくりをするように指示することは、かえって子どもに自由という名の不自由を与える結果になることが危惧される。音楽づくりの活動では、子どもたちに枠組みを与えることで学習すべき内容や何をすべきかを見失うことなく活動することが可能となるのである。

3. 研究方法：わらべうたのリズムと五音音階を用いた音楽づくりの実践

本研究ではわらべうた《ヨイサッサ》のリズムと五音音階を用いた音楽づくり教材の開発を目指すものである。小学校での実践に先だって岡山県私立A大学教育学部で開講された講義内で学生を対象に音楽づくりを実施し、小学校音楽科の授業で教材として扱うことを視野に入れて結果を考察した。前項の分析を踏まえ、子どもたちが音楽づくりをするための枠組みは表2のように設定した。音楽づくり教材開発の観点としては尾藤(2014)が論じており³⁾、本研究の実践は尾藤が挙げた八つの観点に沿ったものである。実践の手順は以下の通りである。

期間：2015年10月～11月

場所：岡山県

対象：私立A大学教育学部に所属する学生74名。5名以上のグループワーク形式で実施した。

1) 《ヨイサッサ》の遊びを行う。

《ヨイサッサ》は言葉とリズムで構成された楽曲である。学習指導要領の「音符、休符、記号や音楽に関わる用語」で定められている四分音符、八分音符、十六分音符、八分休符で構成されており、豊富なリズムを含有しているため同楽曲を音楽づくりの素材として取り上げた。本研究では、同楽曲を唱えながら拍を叩き、歩く遊びを行うことで楽曲の言葉とリズムを学生に定着させた。

2) 分析

楽譜を分析し、遊びを振り返ることで遊びを通じて獲得した楽曲の音符とリズムを結びつけた。

3) リズム楽曲づくり

《ヨイサッサ》のリズムを小節ごとに取り出し、①～⑩の番号を付した(譜例1)。学生はこの10の小節を選択し、リズム楽曲づくりを行った。

4) 旋律づくり

3)で作成したリズム楽曲の音符に民謡でよく用いられる五音音階「ミ、ソ、ラ、シ、レ」から選んだ音を当てはめて旋律づくりを行った。

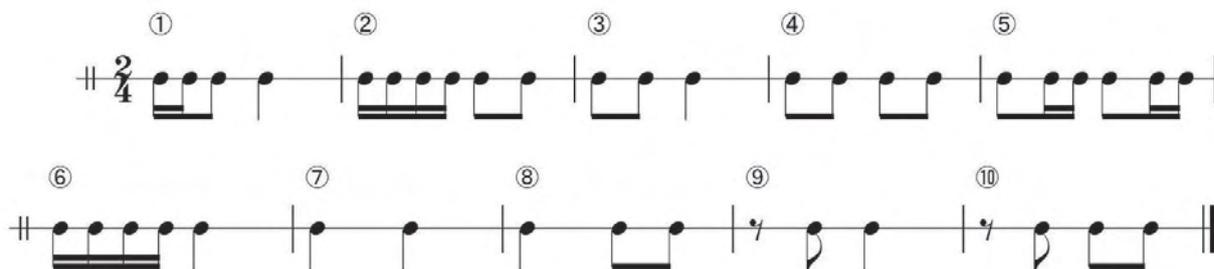
5) 歌詞づくり

作成した旋律に歌詞をつけ、楽曲の完成とした。以下の譜例2から5は実際に学生が作成した楽曲の一部である。

表2 本研究における音楽づくりの枠組み

使用するリズム	使用する音	その他の 音楽的要素	備考
	ミ、ソ、ラ、シ、レ、ミ	4分の2拍子	音符単位ではなく1小節単位で定められたリズムを選択してリズム楽曲を作った後、音を選択して旋律づくりを行う。

譜例1 《ヨイサッサ》に含まれる10小節のリズム



譜例2



これから わたしとあなたで もちつくろう ぺったんぺったん

譜例3



にくより さかな たべたいな

譜例4



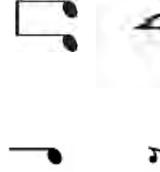
あさから ねむいけど たんいのために きんよういちげん

譜例5



ふゆのおとずれは あたらしい かぜがふく

表1 小学校音楽教科書における音楽づくり教材

学年	教材名	使用するリズム	使用する音	その他の音楽的要素	備考
第一学年	pp.24-25. ことばでリズム		なし	4分の2拍子、 反復、問いと答え	リズムや音高は五線譜ではなく、絵や文字で表される。
	pp.50-51. ほしぞらのおんがく	なし	なし	問いと答え、強弱、音色	音楽は五線譜ではなく、図形譜や擬音で表される。
	pp.56-57. やまびこあそび	なし	なし	強弱、反復	言葉による音楽づくり。
第二学年	pp.18-19. かえるの音あそび	なし	なし	音の高低、 問いと答え、反復、擬声語	擬声語による音楽づくり。
	pp.24-25. せんりつあそび	なし	ソ、ファ、ミ、レ、ド		あらかじめ定められた中から一つの列からひとつの音を選択し、旋律を作る活動。
	pp.32-33. おまつりの音楽		なし	4分の2拍子、 反復	音符単位ではなく1小節単位で定められたリズムを選択し、リズム楽曲を作る。
第三学年	pp.36-37. がっきでおはなし		なし	問いと答え	音符単位ではなく1小節単位で定められたリズムを選択し、リズム楽曲を作る。
	pp.12-13. せんりつづくり		ソ、ファ、ミ、レ、ド	4分の4拍子	あらかじめ定められた中から一つの列からひとつの音を選択し、旋律を作る活動。 リズムは選択しないが楽譜にあらかじめ記載されている。

	pp.26-27. 手拍子でリズム	 なし	なし	4分の4拍子、反復、変化	
	pp.40-41. まほうの音楽	なし	なし	音色、音の重なり、強弱、反復、問いと答え、変化	
第四学年	p.13-14. せんりつづくり		ソ、ファ、ミ、レ、ド、シ	4分の4拍子	あらかじめ定められた中から一つの列からひとつの音を選択し、旋律を作る活動。リズムは選択しないが楽譜にあらからじめ記載されている。
	p.16-17. 言葉でリズムムアアンサンプル			4分の4拍子、反復、変化	音符単位ではなく1小節単位で定められたリズムを選択し、リズム楽曲を作る。
	p.40-41. 打楽器の音楽	なし	なし	強弱、音色、音の重なり	強弱は記号ではなく、図形カードで表される。
	p.48-49. ミソラドレの音でせんりつづくり	 	ミ、ソ、ラ、ド、レ	4分の4拍子	音符カードを組み合わせてリズム楽曲を作った後、音を選択して旋律を作る。
第五学年	pp.20-21. リズムを選んでアインサンプル	 		4分の4拍子、音色、音の重なり、反復、問いと答え、変化	音符単位ではなく2小節単位で定められたリズムを選択し、リズム楽曲を作る。

	pp.44-45. 音階の音で旋律づくり	 	ミ、ファ、ラ、シ、ド、ミ	4分の4拍子、音階、旋律の上がり下がり、反復、問いと答え、変化、終止音	旋律の上がり下がりを示す四つの図形のうちからひとつを選択肢し、旋律の流れを決める。
第六学年	pp.20-2. リズムをつくってアンサンブル	 			
	pp.26-27. 和音の音で旋律づくり	 	ドミソ、ドファラ、ソシレファ	4分の4拍子、和音、音の重なり、反復、変化	I、IV、Vの和音に含まれる音を選択して旋律を作る。二分音符を別のリズムに置き換える活動も含まれる。

4. 結果と考察

上記の実践の成果物の分析および学生の音楽づくり活動の観察から、本研究で提案した音楽づくり教材では以下の効果が得られることが明らかとなった。

1) リズムの理解

学生たちは遊びを通じて楽曲に使用されているリズムを容易に理解することができた。読譜を困難とする学生も遊びの経験によって楽曲のリズムを正確に演奏し、音楽づくりの段階でも迷うことなく提示された10のリズムを用いて作曲することができた。

2) 生活経験の再構成

作成された歌詞は日常生活、季節、クリスマスや正月などを扱ったものが多く、学生たちは身近なものを題材にして創作活動を行っている。デューイのオキュペーションの概念に沿って音楽づくりを分析した小島(2009)は、子どもが思考と表現を統合する音楽づくりを通して得た外界の情報を受け入れるために自己の枠組みを論理と質と感情を統合したものとして組み替えることを教育的意義として述べているが、学生たちが自分の身近なものごとを歌にしたことは、音楽づくりを通じて自分の生活経験を情報として取り上げ、再構成したことを示している。

3) 音楽づくりへの親しみ

最初に遊びを用いて段階的に音楽づくりを行ったことにより、「作曲をする」ということに関して抵抗なく音楽づくりに取り組んでいる様子が観察できた。

本実践の「音楽づくり」では上記のような教育的意義があることがわかった。実践の過程で見出された課題は以下の通りである。

1) 素材となるわらべうたと音階の検討

本研究では《ヨイサッサ》のリズムと「ミ、ソ、ラ、シ、レ」の五音を用いたが、これらの音楽づくりの素材を改めて検討することを考えている。たとえばB県のわらべうたをリズム素材として用いた場合は、B県のわらべうたで多く使われている音階の音を用いて音楽づくりを行うなど、わらべうたの特性と教材性(伊野 2003)にも留意して素材を選択する必要がある。

2) 「分析」段階の検討

すでに述べたように、学生たちは遊びの経験を通じてリズムを学習することができた。しかしながら提出された楽譜には音符やリズムが正確に書けない、拍子記号を書いていないあるいは全ての段に書いているなど、記譜上の問題が多く見られた。この問題の一因と

して、分析の段階で「経験」と「知識」の結びつきが充分に行われていないことが考えられる。分析の段階で経験的に獲得したリズムと楽譜とを結びつけるような学習活動を行うことで、問題の緩和が期待される。

わらべうたの「遊び」の経験から音楽づくりを行う本実践の手法は、音楽教育において一定の効果があることがわかった。実践を通じて得られた課題を検討し、小学校音楽科の教材開発を続けていきたい。

【注】

- 1) ここで重要なのが「遊び」としてのわらべうたの経験である。小島(2009)は遊びを通すことで音楽、言葉、動きの三者の繋がりを保ったまま音楽を再構成することが可能になると述べている。
- 2) 学習指導要領の改訂について論じた研究である鳥崎(2008)でも「音を音楽へと構成する」方針に一定の評価を与えつつ、音楽づくりを形式的で制約の多い活動にしてはならないと述べている。
- 3) 尾藤(2014)は音楽づくり教材開発の観点として以下のように述べている。
 1. 不確定な状況で、ある程度の困難を伴う教材が望ましい。
 2. 学習者が自分なりに課題に対して問題設定できる教材が望ましい。
 3. 学習者が、教材から、このように組み合わせれば、または構成すれば、このような作品や表現になるだろうとある程度、予想できる教材であることが望ましい。つまり、身近な経験などと結びつけて創作できる教材が良い。
 4. 学習者が検証可能な教材が望ましい。つまり学習者のレベルで表現可能な教材が良い。
 5. 飛躍という観点から、イメージーションや想像力が働かせやすい教材が望ましい。
 6. 分析、総合という観点から、一つの教材において、これらを繰り返し行えるような教材が望ましい。
 7. 観察の観点から、教材の事実、作った作品を理解しやすいものが望ましい。
 8. 検証の観点から、確定した状況に仕上げられる教材が望ましい。

【引用・参考文献】

秋山治子(2008), 'わらべうたの概説' から 'わらべうた音楽教育論' へ, 白梅学園大学・短期大学紀要, 44, pp. 63-78.

- 伊野義博 (2003), 郷土の音楽：その特性と教材性 日本学校音楽教育実践学会紀要, 7, pp. 154-165.
- 小島律子 (2005), 戦後日本の「音楽づくり」にみられる学力観：「構成的音楽表現」からの問い直し, 学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要, 9, pp. 194-203.
- 大畑耕一 (2000), わらべうたの考察：音階・旋法とリズムの分析を中心に 藤女子大学紀要. 第Ⅱ部, 38, pp. 49-60.
- 大畑耕一 (2002), わらべうたの音構造に関する考察 藤女子大学紀要. 第Ⅱ部, 40, pp. 21-29.
- 小原光一, 飯沼信義, 浦田健次郎監修 (2015), 小学生の音楽1～6, 教育芸術社.
- 小島律子 (2005), 戦後日本の「音楽づくり」にみられる学力観：「構成的音楽表現」からの問い直し (2 学力と評価, V 音楽科の評価) 学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要, 9, pp. 142-143.
- 小島律子 (2009), 思考と表現の統合をもたらす「音楽づくり」の方法原理と教育的意義－デューイの「オキュペーション」概念をてがかりに－大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門 教科教育, 48 (1), pp. 65-76.
- 小島律子 (2009), 学校音楽教育におけるわらべうたの再考－「教材」としてのわらべうたから「経験」としてのわらべうたへ－大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門 教科教育, 58 (1), pp. 43-55.
- 西條友香 (2008), わらべ歌を学習へ発展させる授業構成の視点 学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要, 12, pp. 205-215.
- 島崎篤子 (2009), 新しい音楽教育をめざして 教大学教育学部紀要, 18, pp. 33-38.
- 島崎篤子 (2012), 1960年代の学校教育における創作学習：わらべうたとふしづくり教育に着目して 文科大学教育学部紀要, 46, pp. 115-136.
- 尾藤弥生 (2010), 「ことば」を音楽表現の素材とした創作活動の意義 北海道教育大学紀要. 教育科学編, 61 (1), pp. 175-186.
- 尾藤弥生 (2014), 思考力・判断力・表現力を育成するための「音楽づくり教材」開発視点の探究：小学校音楽科の教材開発を目指して 北海道教育大学紀要. 教育科学編, 65 (1), pp. 175-186.
- 和田幸子 (2008), わらべうたを用いた障害児保育実践：「遊びの構造分析」による事例の一考察 保育学研究, 46 (2), pp. 225-234.